巻頭言

日本免震構造協会設立にあたって

日本免震構造協会会長
東京大学名誉教授
梅村 魁

現在の建築構造界を外から眺めてみると、どうも活気が感じられない、建築構造設計を目標にしながら、ほんとうの構造設計というものは陰をひそめて、単なる構造計算という場に安住して、その中にだけこもってしまって、内部で不平の言葉を聞くだけだというのは極言であろうか。

今までの建築設計を振り返れば、一つの時代精神を表現しようとするいわゆる建築デザインは別として、この社会の中で、実質的に人間の生活に直接密着して存在している建築の設計というものを考えた場合に、その中の構造分野の占める役割というものを、もう一度考え直す時期ではないかと思う。

ともすると今までの構造分野は、純粋力学と結び付いて、合理的に処理のできる分野として、建築技術の内の安全分野を受持つ場所として、歴史的には、一番古い時代から建築設計に大切な部分を占めてきた。

その後建築設備や、建築プランニングが、それぞれの学問としての基本を踏まえて、設計の中に取入れられ、今日に到っている。

社会の中で有機的に生きていく為の建築としては、設計の初めから、プランニングに対し、構造、設備の技術者さらには施工技術者が、設計に参加し、試行が繰返されるべきである。このことは、それぞれの分野で内部的には語られながら、仲々実行に移されてこない。

少し免震構造とは縁の無さそうな話を冒頭に述べたが、免震構造を有利に活用する為には、設計企画の当初から、このような構造を採用することの利点が検討されて初めて、免震構造の効果も現われてこようというものである。

この協会の設立に当って、今後の協会の使命としては二つの面があろうかと思う。

まず第一は、免震構造がある程度地震動による建物の動きを解析しうる理論に基づいて設計され得るようになった事を踏まえて、この理論を会員相互間にまず普及させることである。この問題は免震構造がまだ大きな地震の経験を経ていないことも考慮に入れて、慎重に取扱う必要のあることは勿論である。

これ等の理論の研究、普及に合せて、免震構造の利点、欠点を整理し、パンフレット等を適宜整えてゆくことが必要であろう。

第二に、このような知識を蓄えることによって設計の最初から免震構造を採用するか否かを議題に乗せてゆく努力が必要で、この為には施主方面への働きかけが協会として絶えず必要である。

超高層建築が実現を見た当初は、比較的デザイン、プランニング、構造、防火、設備等が当初から協力したように思うが、構造分野なども次々に広い意味で規準化され、全体の形が決まった後でのチェック用構造計算に堕してしまっていなければ幸である。

免震構造もあくまでも適所に有効に利用されることを希う次第である。